

東部アジアにおける火器の時代 : 1390-1683

Sun, Laichen[著]
California State University, Fullerton

中島, 楽章[訳]
九州大学大学院人文科学研究院

孫, 来臣
カリフォルニア州立大学

Nakajima, Yoshiaki
Faculty of Humanities, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/25835>

出版情報 : 九州大学東洋史論集. 34, pp.1-10, 2006-04-30. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン : published
権利関係 :



東部アジアにおける火器の時代:1390-1683

Sun Laichen (中島 楽章 訳)

この数十年における「新しい軍事史」の興隆とともに、アジア軍事史に対してもしだいに注意が向けられるようになった。しかし、近世ヨーロッパの軍事史に関する膨大な研究に比べ、アジアの軍事史、特にアジアの火器技術の研究はなお非常に少ない。日本・朝鮮・中国・東南アジアについては、それぞれ質の高い研究がなされてきたが⁽¹⁾、研究状況はなおきわめて分散的であり未統合である。私は東アジアにおける「火器の時代」である、1390-1683年という時期に焦点をあて、こうしたギャップを埋めることをめざしている。

ここでいう「火器の時代」と、ウィリアム・マクニールが *The Age of Gunpowder Empires, 1450-1800* ⁽²⁾ で名付けた「火器帝国の時代」との相違を示しておくべきだろう。

第一に、マクニールが火器革命と火器帝国は最初にヨーロッパで生まれ、ついでアジアに広がった（そして明末・清代の中国のようなアジアの火器帝国の出現につながった）とみるのに対し、この研究では、そのダイナミズムはアジア、より正確には中国に始まり、世界史上初の火器帝国は、ヨーロッパではなくアジアに生まれたと論じたい。これらの帝国には、明朝中国だけではなく、朝鮮王朝や、15世紀末までの黎朝初期のヴェトナム（大越）も含んでいる。

第二に、「火器の時代」は、「火器帝国の時代」よりも、かなり広い範囲をもつ。つまり前者は、「火器帝国」だけではなく、火器技術を利用したすべての国家（大国も小国も）や人々（多数も少数も）に論及するのである。アジアの「火器の時代」のもつ射程はより広く、アジア史における火器技術の歴史的役割についてより十分に明晰な叙述を行うことができよう。

第三に、火器帝国の時代を、明末から1800年以前の清代を含む、1450-1800年までと定義することにより、マクニールはアジアをヨーロッパから見る、ないし「船をデッキから見る」ことになり（van Leurの表現）⁽³⁾、アジアの火器についてもっとも重要な時期を見落とすことになった。この研究では、1390-1683年に焦点を当てて、東部アジアの火器技術にとってもっともダイナミックな時期を明らかにしてゆきたい。

この時期には火器、特に銃砲（小銃・カノン砲など）がひろく用いられ、

火器原料が採掘・交易・消費されただけではなく、アジアの火器技術はもっとも創造的で革新的であった。「火器の時代」が始まった1390年には、中国の火器技術はすでに朝鮮や、「北部東南アジア」（近代の東南アジア大陸部北半・雲南南部・東北インドを含むものとする）に伝播し、まもなく鄭和の遠征にともなって、この技術は東南アジア海域部にも拡散した。アジアにおける中国による最初の火器技術の波は、改良されたヨーロッパの火器技術がアジアに広がり、ヨーロッパによる第二の技術波及が始まった、16世紀初頭まで続いたのである。

第一の波においては、一般の通念とは異なり、中国の、ないし中国由来の火器がアジア史において重要な役割をはたした。以下のすべての事項において、少なくとも部分的には、中国の、および中国由来の銃砲による助力が関わっていたのである。1368年の明朝成立。1388年の明軍によるマオ・シャン王国の征服。1406-07年の明朝による大越侵略。1499年のモンゴル（オイラート）に対する中国側の北京防衛。1471年のチャンパの首都ヴィジャヤの陥落。1527年のシャン族による上部ビルマのアヴァ略奪。1450-1550年ごろの中国や朝鮮による倭寇の抑制と封じ込め。全般的な趨勢としては、おおむね大陸アジア（中国・朝鮮・東南アジア北部）が、海洋アジア（日本・台湾・チャンパ・東南アジア海域部）を押さえ込み優勢であった。1405～1433年における、鄭和の東南アジア海域部やそれ以遠への遠征も、やはりこれによく当てはまる。それは世界最大の農業国家によって遂行され、その最先進の火器技術によって支えられていた。

第二のヨーロッパによる火器技術のアジアへの波及（1511-1683年ごろ）では、そのインパクトはよりドラマティックであった。ムスリムやヨーロッパ人（特にポルトガル人・オランダ人・スペイン人）の到来とともに、より多くの勢力がアジアの舞台に現れた。彼らの先進的な火器技術と宗教的信念は、アジアにおける戦争を激化させた。ヨーロッパ人のなかでも、ポルトガル人がまずアジア人に新たな銃砲を教えた。日本人や中国人の海賊による中国・朝鮮沿岸の略奪がにわかに激化したのも、彼らがヨーロッパからの最先端の火器技術を習得したからであった。実際、1592-98年の日本の朝鮮侵略（および中国やその他のアジア諸国の征服計画）は、ポルトガル式の火縄銃によって勢いづき強力となった倭寇活動が極点に達したものであった。

16世紀に朝鮮の役に深く関与したため、中国は膨大な火器を利用せざるをえなくなった。実際、朝鮮の役の帰結は中国の火器能力によって決まったのである。この戦争の前に、中国は北方辺境に沿った対モンゴル作戦や、その他の軍事作戦において、すでに火器を利用していた。17世紀なかばの明朝と満洲の対決においても、両者は火器の製造と利用に全力をあげた。

最近、黄一農が示したように、火器は清朝の中国征服をもたらした重大な要因であった⁽⁴⁾。その後も、清朝中国は康熙帝の治世の初期に、北方や西北砲のモンゴル族との戦争において、火器を広汎に、効果的に使用した。東南沿岸、特に17世紀の台湾における鄭氏政権の出現は、海上勢力の活力と強靱さをよく示しているが、彼らはヨーロッパの火器技術を（商業とともに）利用し、半世紀にわたって大陸中国と対峙したのである。

東南アジアにおいても、戦争はかつてないレベルに達していた。16世紀末には、ビルマが東南アジア大陸部で（タイ・ラオス・明朝中国に対して）一連の戦争を行い、17世紀にはポルトガル・オランダ・スペイン、およびイスラム諸国家が、東南アジア海域部において土地・交易・宗教をめぐる争い、1627-1672年に、ヴェトナムの北部と南部の内戦が続いた（その結果、ヴェトナムの火器は著名となり、ヨーロッパ人が賛嘆しただけではなく、中国人も輸入した）。ヨーロッパ人、そしてある程度まではムスリム（オスマン帝国）も、東南アジアに優れた火器だけではなく、「宗教戦争」をもたらしたことも重要である。こうした宗教戦争は、近世ヨーロッパの特徴であったが、アジアでは目新しいものであり、この時期のアジアにおける戦争の、ヨーロッパとの類似性をもたらした。キリスト教徒とムスリムとの戦場は東南アジアにも広がった。さらに、17世紀にムガル帝国がついにアッサムを征服したことを加えることもできるだろう。

この時期における全体的趨勢としては、海域アジア（低地ビルマ・アユタヤ・コーチシナ・南ヴェトナム・台湾・日本、ポルトガル・オランダ・スペイン、およびおそらくムガルにも代表される東南アジア海域部）が、大陸アジア（アッサム・北ヴェトナムを含む東南アジア北部・明清中国・朝鮮）に挑戦し、第一の時期の趨勢を逆転させていた。技術、ここでは火器技術が、歴史を決定づけたとはいわずとも、大きく影響を与えていたのである。

16世紀末から17世紀の大部分にかけての戦争の頻度に関する統計は今後の編纂を待ちたいが、暫定的にこの時期を、アジア史を近世ヨーロッパ史にきわめて相似させた、「東部アジアにおける戦国時代」として論じることができるだろう。おそらく後にも先にも、東部アジアの国家や人々の生活において戦争が重大な部分を占め、東部アジアがかくも頻繁な戦いに明け暮れたことはなかった。

ヨーロッパにおいては、17世紀はもっとも交戦が多い世紀であり、「兵士の世紀」であった⁽⁵⁾。その結果、戦争はますます長期にわたる現象とみなされ、「歴史の一般的なテーマと論点は戦争であった」⁽⁶⁾。このことは同じく興味深いことに、17世紀の東部アジア、特に中国（および日本）にもあてはまる。たとえば、17世紀の中国において、学者どうしが「兵事に

について語ること」(談兵)は、一般的な文化現象であった⁽⁷⁾。さらに、彼らの多くは戦争について記述し論議した。かくして16世紀末から17世紀初期(およそ1550-1640年)の中国では、兵書編纂が最高潮を迎えたのである⁽⁸⁾。

東南アジアから台湾・日本・中国にかけて、この時期に火器技術の導入と改良がもっとも進んだのは、まさにヨーロッパと同じような、東部アジアにおける絶え間ない戦争のためであった。また1390年代から1683年まで、軍需物資(硝石・硫黄・銃砲用金属など)の活発で広汎な交易がアジア全域で行われたことも注目すべきである⁽⁹⁾。

1680年代までには、東部アジア全体で(南アジアや西アジアを含むアジア全域でも)、火器技術は停滞し、衰退していったようだ。

朝鮮では、17世紀初頭から大規模な戦争がなかったため、火器技術は総じて急激に衰退した。おおむね同じ時期に、日本における銃砲の製造と使用も劇的に減少した。日本の火器技術の退歩は、1776年における実見者の観察記録にも示されている。「この国では大砲は通常兵器ではない。長崎では衛兵が以前ポルトガルから獲得した若干の大砲を備えているが、それらは礼砲として使われることはない。実際、それらはめったに発射されない。日本人はその正しい使用法をほとんど、あるいはまったく知らない。彼らが長崎で、通常7年間に一度それらを発砲する時には、砲手は長いさおを持って、そこに火縄を取り付け、こうした用心に違わぬよう、時には大砲から目をそむけて着火する」⁽¹⁰⁾。

中国でもまた、17世紀末から、特に1683年に台湾を征服してからは、火器技術の最盛期は過ぎ去ってしまったようだ。平和がはじまり、停滞がつづいた。18世紀(乾隆年間)には、いくつもの広範囲な戦争があったのだが、中国の火器技術のレベルは低く(清朝盛期でさえ、ビルマやヴェトナムに、彼らの優れた銃砲によって負かされてしまった)、火器の数量はかなり少なかった。

さらに清朝は最初期から、宋朝や明朝が硫黄を日本・琉球・東南アジアから輸入していたのと違って、火器製造には主として黄鉄鉱から誘導された国内産の硫黄(炭坑で採れる)に頼っていた。硫黄は玉門・太原・雲南などで製造され、内産の産出量は100-200トンであった⁽¹¹⁾。清朝は台湾での硫黄生産も独占した。たとえば、1696年に福州の武器製造所に火災があり、50万両の硝石・硫黄・火薬が焼失した際には、硫黄採掘のため官僚が台湾に派遣された⁽¹²⁾。海外からの硫黄の交易や貢納はごくわずかで、琉球だけが1748年に12,600斤を送っている。東アジア・東南アジア全体を見ても、硝石・硫黄・銅(銃製造用)の、大規模で活発な対外貿易の時代は過

ぎ去ってしまった。

ヴェトナムでは、特に15世紀（大越の拡張期）と、17世紀（南北ヴェトナムの対戦期）に、火器技術の活力が高かった。ヴェトナムの銃砲を見聞したヨーロッパ人はみな、彼らの銃砲操作の技術に強い印象を受けた。しかし、内戦が終わると、それらはみな退歩してしまった。あるヨーロッパ人は、1714年にインドシナ人は難破船から引き上げられた銃の操作を知らなかったと記している⁽¹³⁾。

東南アジア海域部でも、1680年代までにオランダの独占状態が決定的になると、ヨーロッパ人どうしの激しい戦闘は劇的に減少していった⁽¹⁴⁾。オランダはその前に鄭氏政権によって台湾を追われ、そこでの硫黄交易も幕を閉じた。1660年ごろには、彼らはインドの火器工場も自発的に閉鎖してしまった。二つの著名なポルトガルのアジアでの銃製造所と火器の集散地（マカオとゴアにあった）も、1680年代には閉鎖された。それ以後、重要な推進力であったアジアにおけるヨーロッパ式火器技術は、劇的に衰退していった。

利用しうる考古学的発見もまた、「火器の時代」をめぐる仮説を裏付けている。たとえば、中国では多くの明代の銃砲が発見されているが、それらは清代のものよりもずっと大型である。このことは明らかに日本の事例でも共通しており、朝鮮についても同様に違いない。筆者はこの点について詳しい統計を取りたいと思っている。

私の研究では、大量の一次史料を利用しうる「東部アジア」に焦点をあてるが、さらには地理的範囲を超えて南アジアや西アジアにも比較史的な見地から視野を広げたい。東アジア・東南アジアから他のアジア地域へと視野を広げてみれば、長く続いたオスマン帝国とヨーロッパとの対決が、1683年に後者の優位へと転じたことは、まったく偶然であるとはいえ、きわめて注目される。この年から、オスマン帝国はかつてのようにヨーロッパと対等に戦うことはできなくなった⁽¹⁵⁾。

東部アジアにおける火器の使用は、「火器の時代」以降も続いたが、もっともダイナミックで革新的な時代は過ぎ去ってしまった⁽¹⁶⁾。18世紀のアジアでは、また別の商業の高潮（アンソニー・リードのいう「中国の世紀」）が始まったが、火器技術や火器原料の交易の高まりがそれとともに起きることはなかった。そして火器技術に示された軍事的停滞は、アジアの運命に深刻な結果をもたらすことになる。

東部アジアにおける「火器の時代」の研究は、多方面にわたり斬新な貢献をなしうるだろう。第一に、アジアの火器技術についての詳細なモノグ

ラフはいまだ書かれておらず、この研究が最初のものとなる。それはアジアの、さらに世界の軍事史に重要な貢献となるに違いない。

第二に、アジアの異なる地区（西アジア・南アジア、そして特に東アジアと東南アジア）に関する歴史はなお分散的であり個別化されていて、こうした状況を変えようとする努力も不十分である。本研究は東部ユーラシアを一つの地域的な視野からとらえ、火器技術という共通の糸からアジア史を織り上げ統合しようとする試みである。

第三に、理論的に「軍事史」は「ヨーロッパ軍事史」ではありえず、今や「世界軍事史」となりつつあるが、実際にはなおヨーロッパ中心主義的である。カルロ・M・チポラ、ジェフリー・パーカー、ウィリアム・マクニールらは、いずれも優秀なヨーロッパの火器技術が、1450年以降の「西洋の勃興」をもたらし、「火器帝国の時代」におけるアジアの火器帝国は、ヨーロッパの銃砲の伝来によって生まれたと説いている。これらの研究では、中国は銃砲を発明したものの、それをほとんど実用化せず、ヨーロッパ人がそれらを改良してから、中国人や他のアジア人もそれらを効果的に利用するようになり、それによって歴史が変わったと説いている。本研究では、一方ではアジアの火器技術を、アジアを中心とする（アジア中心主義という意味ではなく）視野から検証し、ヨーロッパを中心としてはみない（しかしヨーロッパの役割が重要でなかったというのではない）。もう一方では、世界史的な視野から、アジアの軍事史を世界軍事史へと統合したい。その焦点は東アジアと東南アジアではあるが、南アジアや西アジアにも適切な考慮をほらう。それによって、「軍事史」を真に世界史的なものとすることを望みうるだろう。

第四に、この研究では技術と歴史的・政治的变化との相関関係についていつその光を当てる。技術、ここでは火器技術の変化が、近世アジアの歴史的・政治的变化に劇的に影響したことを示したい。実際、こうした変化を理解するためには、軍事史的視野を導入すべきである。ジョン・A・ルーンが指摘するように、「17世紀のヨーロッパ史を戦争と軍事制度の影響抜きに考察することは、音楽を聴かずにダンスしようとするようなものだ」⁽¹⁷⁾。このことは「ヨーロッパ」という語を「アジア」に置きかえるだけで、アジアについても等しくあてはまる。「新しい軍事史」学派が主張するように、これまで通常は強調されてきた、黄金（経済）や神（宗教）のような社会経済的・宗教的な力にくわえ、銃（暴力／強制的力／戦争）も歴史変化のもう一つの重要な変数として取り上げなければならない⁽¹⁸⁾。この意味で、本研究はヨーロッパ史に由来する「新しい軍事史」の、アジアの地に対する最初の本格的で掘り下げた試みであり、「新しい軍事史」の地平を広げることが期待できる。

第五に、この研究はアジア経済史にも新たな貢献をなす。火器の誕生、特に火器革命をめぐる経済的な関わり（採鉱・交易・火薬や武器の製造などを含む）について、特に欧米の研究では、アジアのことはほとんど論じられていない。アジアの学界では、小葉田淳による日本－朝鮮間の硫黄・銅貿易に関する先駆的業績⁽¹⁹⁾や、より最近では台湾の硫黄貿易についての呉奇娜の修士論文⁽²⁰⁾のような若干の研究がある。以下の理由から、この点に関してはいっそうの研究が必要とされる。まず、近世のアジア交易については何千もの論考があるのに、火器革命と商業についての有用な研究はごく少ない。学界における主要な関心は、なお香辛料・織物・磁器・茶・米・金属などに向けられている。第二に、小葉田や呉の研究はある問題・ある時期・ある地域に焦点をあてている。この問題をいっそう理解するためには、より包括的で詳しい研究がぜひとも必要である。第三に、商業と火器原料とを連関させることにより、リードの影響力ある「交易の時代」というテーゼに、さらなる変数を加えることができる。

第六に、この研究ではアジア史や世界史における、いくつかの重要な問題をめぐる議論に加わることになる。そこには「軍事革命」・「西洋の勃興」という概念や、アジアが先進的なヨーロッパ式火器技術を発達させることに失敗した問題などが含まれる。たとえば、なぜ中国や、世界の他の非ヨーロッパ地区が、火器を改良することができなかったかという問題について、「チェースのテーゼ」（訳註：明朝中国では、伝統的火器があまり有効ではない対モンゴル戦争に重点がおかれたため、火器の発達が停滞したという仮説）にきちんと答え、それに論駁しうるだろう⁽²¹⁾。チェースの著書は、興味深く刺激的な理論を含んでいるものの、このことを解明できていない。さらに、チェースの研究は、アジアや世界の火器技術に関する最近の理解まではほとんど達していない。それは二次文献もそうだが、特に一次史料について、資料の利用が限られているためである。

結局は史料が問題なのだ。私の研究では中国・ビルマ・ヴェトナム・朝鮮・日本・琉球の（後の四つは古典漢文で記されている）、さらには翻訳されたタイ語・オランダ語の、一次史料を利用する。それらの中には、明実録・清実録・朝鮮王朝実録など、膨大できわめて信頼しうる史料が含まれる。こうした史料はアジアにおける火器技術の研究という目的のために、全体として体系的に用いられることはなかった。記録／文献資料のほかに、大量の考古資料（通常の考古学や、水中考古学による発見物）もまた利用できる。加えて、多数の二次資料も利用してゆく。方法論的には、通常の文献研究に加えて、「火器の時代」を明らかにするため、資料が許すかぎり数量的手法も取り入れてゆきたい。

最後に、そして大事なこととして、筆者は次のことをぜひ希望する。国

別の研究はむしろ重要であるが、アジア、特に中国・日本・朝鮮・東南アジアの火器技術について、集会的・共同的な、国境を越えた研究が着手されなければならない。将来的にはアジアの火器技術の包括的な歴史が、異なる国々の学者によって著されることが望まれるのである。

註

- (1) たとえば、有馬成甫『火砲の歴史とその伝流』（東京：吉川弘文館、1962年）、王兆春『中国火器史』（北京：軍事科学出版社、1991年）、宇田川武久『東アジア兵器交流史の研究——十五～十七世紀における兵器の受容と伝播——』（東京：吉川弘文館、1993年）、許善道『朝鮮時代火薬兵器史研究』（ソウル：一潮閣、1994年）、劉旭『中国古代火薬火器史』（鄭州：大衆出版社、2004年）
- (2) Washington D.C.: American Historical Association, 1989.
- (3) J. C. van Leur, *Indonesian Trade and Society: Essays in Asian Social and Economic History*, Hague: W. van Hoeve, 1955, p. 261.
- (4) 黄一農「紅夷大砲与皇太極創立的八旗漢軍」（『歴史研究』2004年4期）74-105頁。
- (5) Geoffrey Parker, *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West*, Cambridge: Cambridge University Press, 1996, p. 1
- (6) J. R. Hole, *War and Society in Renaissance Europe, 1450-1620*, New York : St. Martin's Press, 1985, pp. 38-9.
- (7) 趙円「談兵——關於明清之際一種文化現象的分析」（陳平原・王德威・商偉編『晚明与晚清：歴史伝承与文化創新』武漢：湖北教育出版社、2002年）5-22頁。
- (8) 最初のピークは戦国時代（紀元前475-221）であり、第三のピークは中国が西洋の侵略に直面した19世紀である。
- (9) Laichen Sun, "Gunpowder Technology and Commerce in East and Southeast Asia, c. 1368-1683," Presented at workshop "Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia," Oct. 29-30, 2004, Okinawa, Japan.
- (10) C. R. Boxer, "Asian Potentates and European Artillery in the 16th-18th Centuries: A Footnote to Gibson-Hill," *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, 38-2, 1966, p. 170.
- (11) Zhang Yanming, "Ancient Chinese Sulfur Manufacturing Processes," *Isis*, 77-188, p. 492.
- (12) 郁永河『採硫日記』（叢書集成新編、第93巻）。
- (13) Boxer, "Asian Potentates and European Artillery in the 16th-18th Centuries," pp. 167-8.
- (14) Anthony Read, *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680, vol. 2, Expansion and Crisis*, New Heaven: Yale University Press, 1993.

- (15) G. Agoston, "Ottoman Artillery and European Military Technology in the Fifteenth to Seventeenth Centuries," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung* 47, 1994, pp. 46-78.
- (16) ただし戦争の必要から火器技術が増強された18世紀のビルマ・シヤム・ヴェトナムなどを無視するわけではない。Victor B. Lieberman, *The Strange Parallels: Southeast Asia in Global context, c. 800-1830*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003, pp. 153, 165-66.
- (17) John A. Lynn, "Tractical Evolution in the French Army, 1500-1660," *French Historical Studies*, 14, 1985, p. 167. Clifford J. Rogers, "The Military Revolution in History and Historiography," in idem, *The Military Revolution Debate: Readings on the Military Transformation of Early Modern Europe*, Boulder: Westview Press, 1995, p. 9, note 20 より転引。
- (18) John A. Lynn, "Clio in Arms: The Role of the Military Variable in Shaping History," *The Journal of Military History*, 55-1, 1991, pp. 83-95.
- (19) たとえば、小葉田淳「中世における日朝銅貿易」(小葉田淳『金銀貿易史の研究』法政大学出版局、1976年)。
- (20) 呉奇娜「十七-十九世紀北台湾硫黄貿易的政策演變研究」(国立成功大学、2000年)
- (21) Kenneth Chase, *Firearms: A Global History to 1700*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

【訳者附記】

本稿の著者 Laichen Sun (孫来臣) 氏は、北京大学・北イリノイ大学で東南アジア史を専攻したのち、2000年にミシガン大学で Ph. D. を取得し、現在は California State University, Fullerton の副教授の任にある。元来の専門は14世紀以降の東南アジア史、特にビルマ史であったが、近年では明朝と東南アジアとの関係史や、アジアにおける火器普及などに研究テーマを広げている。主要な論文には、“Chinese Historical Sources on Burma: A Bibliography of Primary and Secondary Works,” *Journal of Burma Studies*, 2, 1997. “Chinese Military Technology Transfers and the Emergence of Northern Mainland Southeast Asia, c. 1390-1527,” *Journal of Southeast Asian Studies*, 34-3, 2003 などがある。また著書として、*Ming-Southeast Asian Overland Interactions, c. 1368-1644*, Singapore University Press が近刊予定である。

ここで訳出したのは、科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」化交流部門のワークショップ、「火器技術から見た海域アジア史」(2006年1月、九州大学文学部)における、Laichen Sun氏の報告論文“*An Age of Gunpowder in Eastern Asia, c. 1390-1683*”であり、Sun氏が現在準備している同名の著書の全体構想を示したものである。

1980年代ごろから、欧米では軍事技術、特に火器技術の発達と伝播が、世界史の展開にはたした役割が注目されてきた。代表的な著作としては、William H. McNeill, *The Pursuit of Power*, University of Chicago Press, 1982 (高橋均訳『戦争の世界史』刀水書房、2002年)、Geoffrey Parker, *The Military Revolution*, Cambridge University Press, 1988 (大久保桂子訳『長篠合戦の世界史——ヨーロッパ軍事革命の衝撃 1500～1800年——』同文館出版、1995年)、Kenneth Chase, *Firearms: A Global History to 1700*, Cambridge University Press, 2003. などがある。これらの著作は、伝統的なヨーロッパ中心の歴史叙述に対し、アジアにおける火器技術の発達や普及についてもひろく論じているが、やはり16世紀にヨーロッパ式の火器が伝来する以前の、アジアの伝統式火器についての検討は手薄であった。これに対しLaichen Sun氏は、東部アジア（東アジアと東南アジア）においては、すでに14世紀末から「火器の時代」をむかえ、火器技術の発達と普及がアジア史の展開に大きな役割を果たしたと論じているのである。

むろん15世紀以降のヨーロッパで発達した火器と、東部アジアの伝統的の火器の間には大きな技術的落差があり、ヨーロッパ式火器の伝来がアジア史に与えたインパクトを過小評価すべきではない。しかし反面、Sun氏が論じるように、特に中国の伝統的の火器技術は、15世紀までの東部アジアにおいて、これまで考えられていた以上に重要な役割を果たしていたことも確かであろう。従来は明朝の軍事活動は北方の対モンゴル防衛を中心に考えられ、ステップの遊牧民に対しては伝統的の火器の効果は限定的であるため、火器技術の意義も低く評価されがちであった。しかし明朝と東南アジア、また東南アジア諸国間の状況に目を向けると、火器技術のもつ意義はより重要であったと考えられるのである。

なお上述のワークショップ「火器技術から見た海域アジア史」では、Laichen Sun氏のほか、日本史・朝鮮史・中国史・東北アジア史の研究者による報告とコメントがなされ、東部アジア全域における火器技術の歴史的意義について議論が行われた。ワークショップの要旨は、特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」のニューズレター『青波』第2号に掲載される予定である。